

別紙

2006年度 文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム（特色G P）」採択 『情報環境の整備と成績評価の厳格化 - 学修支援システムD U E TとG P A得点分布公表 - 』概要

同志社大学

1. 本プログラムの特色

本取組の特性は、図書館利用の活性化も念頭に置いた学修支援システムの整備をとおして、学生の学習意欲の向上、教育内容の公開性、そして、成績評価の厳格化という現代日本の大学教育が直面する三つの最も大きな課題に全学的に取り組んでいる点にある。

現代情報社会においては、情報の活用を積極的に行う学生ほど、学習意欲が高くなる傾向が見られることから、本学は、近年の大学教育研究の上記の知見に基づき、シラバス情報の充実、図書館利用促進方策、GPA 得点分布公表を中心としたキャンパスライフの情報環境整備にカレッジ・インパクトという教育的観点から取り組んでいる。

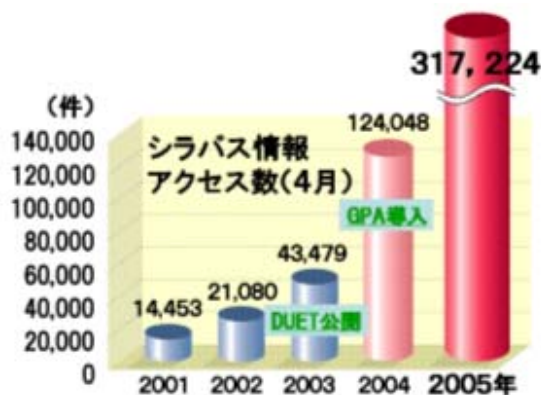
学生が教育情報を必ず活用するのは、履修科目登録における科目選択時であり、全学教員の協力のもと、シラバス情報の整備を実現した上で、1999年に全学開講科目を対象としたシラバス情報検索システムを完成した。また、特筆に価する付加機能としては、シラバス情報に掲載されている参考文献名横のボタンをクリックすると、即時にその文献に関する書誌所蔵情報が表示される機能がある。この参考文献表示機能によって、シラバス情報が単なる科目登録をする際の情報ではなく、授業期間中の学習情報としても活用されることが可能になっており、図書館利用の奨励によって、学生の自主的学習促進にも大きな効果を上げている。

本取組の最も意欲的な点は、平成10年度の大学審議会答申に盛り込まれて以来、現代日本の大学教育が直面する課題となったGPA制度の活用等による成績評価の厳格化に真摯に取り組んでいる点にある。成績評価の厳格化は、従来、成績評価作業そのものが個々の教員の<聖域>となっていたため、組織的な働きかけが最も困難な領域であったが、GPA得点分布を制度的に公表して、シラバス情報整備と合わせて、教育内容の公開性を組織的に高めた点に、本取組の最大の個性がある。成績評価の厳格化を目標に掲げて、6,000科目以上のGPA得点分布を学内外に公表している事例は、国内において本学以外にはない。

また、本取組に関して、2002年度以降の発展段階において、学生と教員の親密なコミュニケーションを支援するために、教育的効果を考慮した学生個人別のシステム環境の充実に力点を置いている点も大きな特色である。

2. 学生への効果 - シラバス情報へのアクセスが増大

本取組の教育効果の評価方法に関する独自の工夫としては、従来のアンケート調査に加えて、学修支援システム DUET の多岐にわたる機能へのアクセス数等を測定することによって、取組の有効性の定量分析とデータ蓄積に努めている点にある。



学修支援システム DUET の有効性を測定する指標としては、履修科目登録期間中のシラバス情報のアクセス数に注目している。左のグラフに見られるように、2001年度の全学統一様式によるシラバス記載の徹底方策と、学生個人別環境の整備の結果、2003年度にはアクセス数が倍増した。さらに、2004年度のGPA制度導入を契機として、2005年度にはアクセス

数が30万件を突破した。単純計算をすると、約25,000名の在学生在が4月の履修科目登録期間に一人当たり延べ10科目以上シラバス情報を参照したことになる。登録関係資料の増加に伴う学生のシラバス離れを改善するという本取組の当初の目的は、この10年間の実施過程の中で、十分に達成されたものと判断している。

3. 学生への効果 - GPA 得点分布公表によって学習成果を自己評価



GPA 得点分布公表のアクセス数も、左のグラフに見られるように、着実に増加している。GPA 得点分布公表を開始した2004年度春学期には、公開初日のアクセス数が36,466件だったが、2005年度春学期には76,184件に倍増し、秋学期にはさらに増加した。GPA 得点分布公表によって、個々の学生が自分の学習成果の自己評価を客観的に行うとともに、次年度の科目登録資料としても積極的に活用していることが読み取れる。GPA 得点分布公表は、本学におけるカレッジ・インパクトの重要な要素として確実に定着しつつある。

4. 学生への効果 - シラバス掲載の参考文献利用が一挙に増加



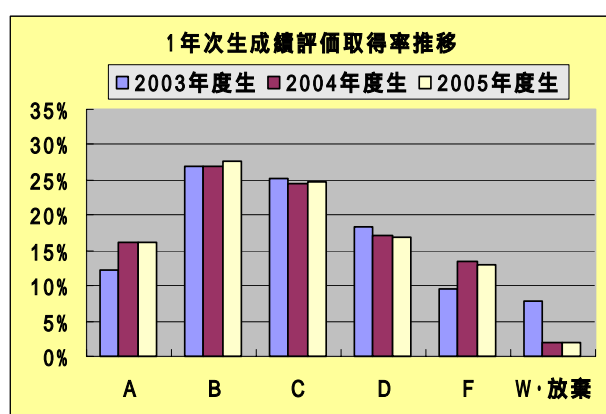
学修支援システム DUET の開講期間における活用度の指標としては、図書館利用の最大の目安となる図書館貸出冊数に注目している。左のグラフに見られるように、図書館貸出冊数は、前述のシラバス情報アクセス数の増加と連動し

て、2005年度に飛躍的に増加している。さらに、貸出図書の内容を分析すると、貸出回数の多い図書の上位20位の約70%がシラバス情報に記載された参考文献であることが確認されている。また、図書館ではシラバス冊子を作成した1992年より、シラバス情報に掲載されている参考文献をすべて収書しており、これらのことから、シラバス情報と図書館情報の有機的連関が学生の図書館利用と自主的学習の奨励に貢献しているものと判断できる。

5. 教える側へのインパクト - GPA 得点分布データを積極的に活用

成績評価の厳格化を目的とした GPA 得点分布公表が教員に与えた意識変化を検証するために、2005年度に全専任教員を対象に「厳格な成績評価に関する教員意識調査」を実施したところ、対象教員の70%にあたる546名から回答があり、教員間に成績評価の厳格化に対する関心が高まっていることがうかがえた。それを裏付けるように、GPA 制度導入によって、成績評価基準が変わったという回答は約45%にのぼったが、そのうち、「成績分布に配慮するようになった」という回答が約25%、また、「高得点を付ける数を増やした」という回答が約17%あった。GPA 制度導入に際しては、従来の「優」(80点から100点)をA(90点以上)とB(80点から89点)に分割して、最上位成績者の奨励を目的の一つとしていたが、GPA 制度導入の趣旨が多くの教員に正しく理解されていることが明らかになった。また、GPA 得点分布公表に関しては、約65%の教員がホームページ上で「見たことがある」と回答しており、約30%の教員が公表された得点分布を参考にして「評価基準を変えた」と回答している。

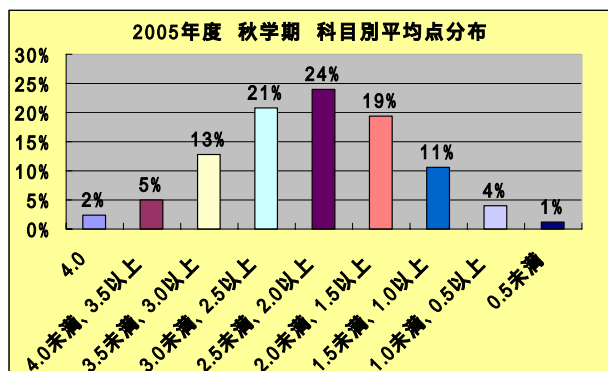
6. 教える側へのインパクト - 採点の厳密化につながる



GPA 制度導入が教員及び学生に与えた影響を検証するために、1年次生得点分布の経年変化を調べると、左のグラフのような結果になった。有意的な変化が見られる点は、A(90点以上)の割合で、GPA 制度導入以前の2003年度においては、12%であったが、GPA 制度導入後の2004年度及び2005年度においては、16%に上昇している。この得点分布の変化

は、最上位成績者の奨励という GPA 制度導入の目的が多くの教員によって正しく理解されていることを傍証している。また、GPA 制度導入以前の2003年度においては、登録はしたものの定期試験等の受験に至らない安易な登録を示す「放棄」が8%もあったが、GPA 制度導入後の2004年度及び2005年度には、2%に激減している。この

得点分布の変化は、履修科目登録において、責任ある主体的選択行為を奨励するという本取組の目的が実を結び始めていることを物語っている。さらに、GPA 制度導入以前の 2003 年度においては、10%であった F (59 点以下不合格) が、GPA 制度導入後には 13~14%に上昇していることは、GPA 得点分布公表によって、成績評価の厳格化に関する教員の自覚が高まりつつあることを示唆している。



また、GPA 得点(4 点満点)分布の科目別分析をすると、実施 2 年目の 2005 年度秋学期においては、平均点 3.5 点以上(旧来の 100 点満点方式に換算すると 85 点以上)の高得点科目は約 7%、平均点 1.5 点以下(旧来の 100 点満点方式に換算すると 65 点未満)の低得点科目は約 16%にとどまった。開講科目の中には、平均点

が高くなりやすい初修外国語科目や導入教育科目、平均点が低くなりやすい再履修科目が含まれることを考慮すると、平均点 2.5 点(旧来の 100 点満点に換算すると 75 点)前後をピークにしてバランスの良い曲線を描く全体結果は、成績評価の厳格化に対する各教員の全学的共通理解が浸透しつつある結果と判断できる。

7. 学生の学習意欲向上への取り組みはさらに進化する

- ・「成績評価の厳格化」を全学的に推進するプロジェクトチームの発足
- ・GPA 得点分布分析による各学部の FD 活動の推進
- ・授業情報公開の一層の充実
- ・個人別システム環境拡充による、学生と授業担当者とのより密接なコミュニケーションの実現